

機関番号：42418  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2008～2010  
 課題番号：20520270  
 研究課題名（和文） エール大学図書館所蔵S・ウェルズ・ウィリアムズの  
 自筆書簡の判読と活字化  
 研究課題名（英文） Transcription of the S. Wells Williams Autograph Correspondence  
 (Manuscripts and Archives, Yale University Library)  
 研究代表者  
 宮澤 眞一 (MIYAZAWA SHINICHI)  
 埼玉女子短期大学・国際コミュニケーション学科・教授  
 研究者番号：80109727

## 研究成果の概要（和文）：

当初の目的・目標を超える以下の4点の成果を生み出した。(1) エール大学図書館所蔵のS  
 WW書簡を10本のマイクロフィルムに初めて収録できた。(2) SWWの自筆書簡約1300通を  
 判読し転写テキストを完成した。(3) 精力的に研究発表(論文7・学会発表講演7・書評2)  
 を行い、別刷の報告書小冊子に再録した。(4) 2012年春に中国の二つの出版社から研究成果  
 の本体(SWW書簡及び中国・日本遠征記)の転写テキストを5巻で出版するための準備に入  
 った。

## 研究成果の概要（英文）：

During the three years I have been able to produce more fruits of research and study  
 than expected as follows: 1) All the SWW correspondence at Yale Univ. Library Archive  
 have been microfilmed thanks to the support of this fund. 2) Diligent concentration in  
 reading the SWW correspondence on microfilm led to the result of transcription of c. 1300  
 out-letters of SWW, besides a large portion of his in-letters 3) 7 articles, 7 speeches  
 at international conferences and domestic ones and two reviews have been made public in  
 relation to my study of SWW. 4) Two publishers in China are ready to publish the  
 above-referred transcription texts in 5 volumes in 2012, the 200<sup>th</sup> anniversary year of  
 SWW's birth.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究代表者の専門分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：

S・ウェルズ・ウィリアムズ 中国初期プロテスタント伝道史 澳門史 J・C・ヘボン  
 中国版印刷史 アンソン・バーリングゲイム 日本開国 薩英関係史

## 1. 研究開始当初の背景

ウィリアムズ (Samuel Wells Williams: 1812~1884) は、米国伝道協会から中国に派遣された文書伝道師 (1833~1856) であり、後半の 20 年は (1856~1876)、米国外交代表部で中国語通訳・書記官になった。晩年には中国学の最高権威と認められ、エール大学の初代中国学教授に迎えられた。ウィリアムズ再評価の機運が、2003 年前後から主として中国で高まってきているものの、総合的な研究の成果は、内外で未だ見られない状況にあった。

続いて以下に、本研究に先立つ自身の研究成果について述べてみたい。研究業績表のなかで、ウィリアムズ伝記研究と関連するものは、論文・学会発表・書評などを入れて、10 本ほどになる。年号順で言えば最初のものが、クリスチャン新聞に掲載された保永貞夫著『七人の日本人漂流民』の書評 (1971 年) である。モリソン号事件と日本語訳聖書の誕生を中心に論評しているが、以来ウィリアムズは気になる存在になった。それも 35 年である。2004 年には、息子フレデリックによる前出伝記の翻訳作業に取り組むことになり、最近ようやく全訳を完了した (2008 年出版)。

1997 年、鹿児島県立図書館所蔵の『薩摩辞書』を複製出版したとき、「主として日英文化交流史から見た『薩摩辞書』」と題して、別刷の長文解説を書いた。これがウィリアムズ伝記研究に向かわせる直接の契機になった。漢字と英字の混合する金属活字印刷の歴史を中心にして論じ、マカオ・広東時代のモリソンから、ウィリアムズの役割を論じ、更に上海時代と横浜時代のヘボンに至る伝道印刷所の流れを追跡することができたからである。

その後、ウィリアムズ伝記の背景研究を追求したい目的から、マカオ・広州に 4 回、北京に 4 回の現地調査を行い、二つの紀要論文に纏めた。一つは 2000 年初出「アヘン戦争前夜のマカオにおける英国居住についての考察」。これは最近、中国語に翻訳され、中国の出版社から共著として出版された。もう一つは、2003 年「マカオ新教徒墓地に眠る日本人物語」である。マカオで死亡したウィリアムズの末弟の碑文を全文転写したほか、ペリー横浜来航のときに電信装置の披露で名前を残した人物と同一人である、と初めて断定した。

ウィリアムズの名前をタイトルに入れた最初の論文は、2006 年「伝道印刷者 S・W・ウィリアムズのマカオ生活」であるが、月刊英文雑誌『中国叢報』(Chinese Repository: 1832-51) の運営について、前述の別冊解説で扱ったテーマを進展できた。全巻の中から、ウィリアムズが書いた原稿を特定化し、155 点のリストを添付できた。中国

学の先駆者と評される彼の発展を辿る上で、大事な手がかりになるであろう。2006 年 3 月には広州市中山大学で開催された国際シンポジウムに参加し、「S.W. Williams in Canton and Macau」と題する英語口頭発表を行った。

海外でのウィリアムズ先行研究のうち、米国では Michael C. Lazich の E.C. Bridgman (2000) と、Jacques M. Downs の The Golden Ghetto (1997) が、多少ともウィリアムズに関連する研究書としてユニークであった。前者は、中国に派遣された宣教師たちの希有な中国語能力ゆえに、米国外交代表部所属の通訳や書記官に抜擢される宗教家と外交・政治の絡み合う矛盾を扱っている。後者は、自筆文書の探索を米国各地の資料館で行って、優れた業績を残した。ヴァン・ダイク博士 (マカオ大学) は、広東貿易の分野で、欧州系商社の自筆文書を探索しており、ダウンズの自筆探索手法の貴重な後継者と言える。

更に中国では、最初期の英米プロテスタント系宣教師に関する調査研究と再評価の機運が、南部で前出ヴァン・ダイク博士、北部で顧鈞博士 (北京外国語大学) を中心に、高まってきていると言える。とりわけ、米国人伝道師ウィリアムズについては、英国人宣教師モリソンの双壁とする、高い評価を受けている。2003 年に広西師範大学出版社は、モリソン夫人の著したモリソン伝 (1839 年初版) と、前述息子フレデリックによるウィリアムズ伝 (1888 年初版) を同時に翻訳出版した。後者『衛三畏生平及書信』の訳者は顧鈞博士である。『中国叢報』と著書『中国総論』(The Middle Kingdom, 1847) をもって、中国学の分野に於ける先駆的米国人の第一人者と位置づけており、ハーバード大学神学部図書館で探索調査するために、一年間の留学予定で 7 月に北京を出発した。

日本のウィリアムズ研究は、顕著な業績を産出できていない。原因は第二次資料だけで終わっているためである。海外伝道を扱った都田恒太郎著『ロバート・モリソンとその周辺』(1974 年)、塩野和夫著『19 世紀アメリカン・ボードの宣教思想』(2005 年) と諸論文では、米国伝道雑誌等の第二次資料調査に終始しており、発展性を感じられない。モリソン号事件とウィリアムズの役割に関する研究にしても、労作の相原良一著『天保八年米船モリソン号渡来の研究』(昭和 29 年) の域を資料的に出していない。研究者の緻密な成果を基礎にして、豊かな想像力を駆使して創作する小説家の作品。例えば、春名徹著『にっぽん音吉漂流記』や三浦綾子著『海嶺』には、当然、歴史的迫真力や新鮮さが出ていない。原因は同じである。ペリー艦隊の首席通

訳として来日したおりの日記を翻訳出版した雄松堂版もまた、第二次資料の使用に終始していたからである。

英文学の伝記的研究や伝記執筆にあたっては、印刷資料(本人の書いて発表した作品・著作・日記・書簡集等と、家族知人や研究者による伝記・研究書・論文等・新聞雑誌記事)など、所謂、第二次資料を渉猟したあとに、やがて第一次資料に迫りたい段階が訪れるものである。不可欠な基礎的伝記資料であるためだ。本研究の独自性もこの点にあり、ウィリアムズ研究の第一人者という自覚に立ち、第一次資料の精査及び、解読・活字化を最初に試みる国際的な意義はあろうと考えた。

自筆文書の解読・活字化という作業には、忍耐力と緻密な正確さを要求される。英語力だけでなく、テーマに関する精通とか背景の幅広い知識、一種の勘のような判読力さえ欠かせない。誰にでも出来るものでない。ここ30年間、大英博物館や英国公文書館、プリンストン、コロンビア大学等の図書館自筆部門に通っては、鍛えてきた能力と経験を本研究の中でフルに活かしたい

## 2. 研究の目的

米国エール大学図書館の所蔵するウィリアムズ関連資料コレクション(The Samuel Wells Williams Family Papers MS547)の調査研究が、不可欠な基本作業である。しかし同資料の総量は、以下のように、28箱と追加分の3箱、全体で31箱に上り、2025 linear feet という膨大なものであった。

①自筆書簡(1824-1939)、10箱。

②自筆の日記・原稿・メモ及び雑誌・新聞切り抜き(1828-1905)、8箱。

③主として息子フレデリックの私的文書(1876-1927)、6箱。

④両親等家族の私的文書(1831-1941)、4箱。

⑤追加分(1831-1936)、3箱。

そこで継続期間3年の研究目的を以下の2点に限定した。

(1)上記コレクション全体の精査。

(2)ウィリアムズの自筆文書(書簡・日記・原稿)のうち約3000頁分、コレクション全体では約1/5分の資料を対象を絞り込み、解読と活字化の作業を完成させる。

## 3. 研究の方法

SWW書簡10箱分の自筆書簡資料をマイクロフィルム化して10本のリールに収録した。これには約半年という作業時間と50万円近い作成費用を要した。

2009年度と2010年度の2年間をかけて、自宅と研究室に準備してあったマイクロフィルム・リーダーを駆使することで、約1万頁分の書簡(both out- and in- letters)

の判読につとめ。時間・根気・視力との戦いであり、2年のあいだ自宅で1日平均10時間を費やした文字通り大学受験生スタイルの勉強態勢となった。

次に、研究方法の要旨として、ここで述べておきたいことが一つある。自筆文書の解読は、ときとして困難を究める場合が多々起こり得る。とりわけ、ウィリアムズ宛書簡は、発信者が100名近くに上る。M.C.ペリー提督や、C.ヘボンを初めとして多彩な人物たちからの自筆書簡であるので、それだけ多種多様な筆跡を判読しなければならない。

解読困難な箇所については、それぞれの専門的立場から、助言・情報提供の形での助力を以下の研究者にお願いした。

顧鈞博士(北京外国語大学)。そのほかに関連資料の収集では、浙江大学大学院歴史系博士課程後期に在学する中国の若手研究者(田力氏)、及び東北学院大学大学院文学研究科博士課程後期英文学専攻の若手研究者(宮澤文雄氏)に、それぞれの立場から、研究の助手的役割を演じていただき世話になった。

また、山本周博士(長崎県立大学)には、終始、中国滞在中に助言をいただいたが、特に初年度の2008年夏には父親の周俊業先生(北京大学法学院シニアプロフェッサー)の所有するマンション使用の提供を受けられたので、研究資金面で大いに助けていただいたことになる。

更に、SWWの遺族であり、一族の家族史に詳しいHuntington Williams IIIともエール大学図書館を通じて知り合え、自筆文書で判明できなかった一族にかかわる人名や地名の調査のうえで、貴重な情報を得ることができた。

## 4. 研究成果

SWW発信の全ての書簡、ヘボンやペリーなど歴史的人物から受信した書簡等、1832年から1884年に渡る約3000通の自筆書簡を判読してパソコンに入力できた。

研究の進行に合わせて、著書2・論文7・国際学会発表講演会7・月刊雑誌での書評2など、中間的な成果発表に努力したが、それらを別刷の小冊子報告書に再録した。

もっとも大きな成果は、2012年夏までに予定されている中国の出版社(広西師範大学出版社)から4巻の英文SWW書簡集を発行する、それに中国の別の出版社(大象出版社)からは、日本・中国遠征記の英文記録1巻を出版する運びとなった点にある。

ここ20年ほどの間に3回の科研費による自筆文書判読と転写作業を補助していただいたが、国際的な出版物を発表できることは、多大の感謝であり、研究者生活のフィナーレを有用に迎えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

1. 宮澤眞一「避暑地としての北京西山八大処」埼玉女子短期大学紀要、査読無、2011年3月、pp.105-136.
2. 宮澤眞一「略談魯迅作品的英、日翻訳」魯迅北京研究月刊、査読有、2011年2月、pp.37-40.
3. 宮澤眞一「アンソン・バーリンゲイム」埼玉女子短期大学紀要、査読無、2010年9月、pp.243-277.
4. 宮澤眞一「19世紀初期旅居澳門・広東伝教士對日語的研究」、長崎中国学会、査読無、pp.346-355.
5. 宮澤眞一「日本開国に於ける澳門の歴史的位置に関する試論的考察」、埼玉女子短期大学紀要、査読無、2010年3月、pp.117-149.
6. 宮澤眞一「米中日の文化交渉史におけるS・ウェルズ・ウィリアムズの再評価」、知性と創造、日中人文社会科学学会、査読無、2010年2月、pp.48-54.
7. 宮澤眞一「A Study of S. Wells Williams' Early Letters」、埼玉女子短期大学紀要、査読無、2009年3月、pp.11-31.

[学会発表] (計7件)

1. 宮澤眞一「魯迅著作的英、日文翻訳」、北京魯迅博物館学術報告会、2011年3月11日、北京魯迅博物館.
2. 宮澤眞一「国際理解の四重奏」、鹿児島国際大学国際文化学部講演会、2010年11月17日、鹿児島国際大学講演会ホール.
3. 宮澤眞一「The Western Hills near Beijing」、第二回中日文化比較シンポジウム、2010年9月10日、瀋陽市・東北大学.
4. 宮澤眞一「Americans in Macau and the Opening of Japan」、Americans, Macau and China、2008年12月9日、マカオ・澳門大学歴史学部.
5. 宮澤眞一「The Chinese Repository, (1832-1851, Canton & Macao) and Its Historical Significance」、日中人文社会科学国際シンポジウム、2008年9月、中国・石家庄市・河北科術大学文法学部.

[図書] (計3件)

1. 宮澤眞一『国際理解の四重奏』、高城書房、2010年4月、pp.208.
2. 宮澤眞一『波うちぎわの Satsuma 奇譚』、高城書房、2009年5月、pp.195.
3. 宮澤眞一訳・フレデリック著『S・ウェルズ・ウィリアムズ 生涯と書簡』、高城書房、2008年9月、pp.562.

6. 研究組織

(1)研究代表者

宮澤眞一 (MIYAZAWA SHINICHI)

埼玉女子短期大学・国際コミュニケーション学科・教授

研究者番号： 80109727

(2)研究協力者

1. 顧鈞 (GU JUN)

北京外国語大学・国際交流センター・准教授

2. 山本周 (YAMAMOTO AMANE)

長崎県立大学国際文化学部・准教授

3. 宮澤文雄 (MIYAZAWA FUMIO)

東北学院大学大学院文学研究科博士課程後期英文学専攻・3年次在籍院生

4. 田力 (PECK TIAN)

浙江大学人文学院歴史系博士研究生